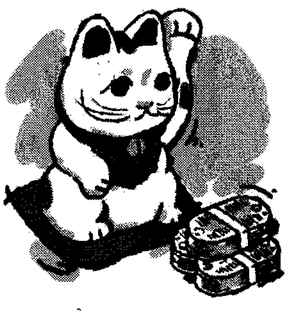
三月のテーマ　お金と倫理

儲けたい気持ち

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載します。



え・城谷俊也

儲けるというと、なんだか、いやしいような感じがして、口にしたり、耳にしたりすることを、きらう人がある。しかしそうした人でも、おそらく心の中では、もっとお金があったらなぁと、ひそかに思っているにちがいない。もし隣の人か、友人などが宝くじにあたったとすると、表面ではいくら知らぬ顔をよそおっていても、心の底にはうらやましいといった気持ちが動くであろう。

もともと金というものは、いくら儲けても決して悪いものではない。武士は食わねど高楊枝などとは、もはや時代遅れであろう。何の遠慮があろうか。大いに儲けて生活を便利にし、家庭にうるおいをもたせ、ますます楽しく社会のために働けるようにすべきではなかろうか。

しかし人はどうなっても、自分だけが儲かればよいというやり方では、最後にはひどい目にあうことを覚悟しなければならない。

金を儲けて、自分だけがよいことをしようといった精神では、結局その金は自分を苦しめる。それは冷静にみれば、儲けるだけ損をするということだ。儲けた金は生かして使うためにある。仕事をますます大きくするとか、公共事業に出費するとか、その他金の生かし方は、いろいろある。

もともと人は、自分の仕事を通じて世に貢献し、そうして自分も生活できるようになっているのである。だから世に役立つためのわが仕事を、ますます立派にするために、金を使えばよい。うんと儲けてうんと世の中に役立てるのだ。

いったい儲けるというよりも、儲かるというのが、より正しい。儲けようとするより、正しい働きをしていると、金の方が自然に後から追っかけてくるものだ。

たとえば約束は必ず守るとか、客には徹底的に奉仕するとか、家庭をなごやかにするとか、そうした仕事の軌道をまっすぐに歩む時、自ずから利益があがるようになる。

大切なのは、あくまでも仕事に徹する、事業に生きる、働きに終始する、ということなので、儲けるとか儲けないとかにとらわれているようでは、やはり感覚や欲望にあやつられているのである。儲けるということ自体が尊いのではなくて、さきに述べたように、「何のために」儲けるか、儲けて「どうするか」ということのほうに、もっともっと大事なものがある。

こうしたより高い精神的意義にたった上で、私たちはもっと「儲ける」ということを、真剣に考えてみなければならない。自分が儲けることに打ち込んでいないで、人に儲けさせて、自分がその甘い汁を吸おうとでも考えていることがありはしないだろうか。

真剣にまじめに考えて儲けようとする時、いつかは必ず儲かるのである。妻は夫に儲けさせようとし、自分は浪費している。夫は妻に倹約を強いながら、自分はいい加減に仕事をしている。そうしたことが経営者や従業員の間にあれば、決して仕事の成果はあがらない。要は自分自身が、まず先頭を切って儲ける気持ちになりきることである。（『丸山竹秋選集』より）